

TOSHIBA

Leading Innovation >>>

FUTURE DESIGN

ELEVATOR NEWS

安全で快適なエレベーターの未来をデザインする

2013

vol. **36**

特集 ● 交通と都市の未来形

出雲イヅム

伝統と文化を守り伝える
出雲流町づくりの極意

東芝エレベータ株式会社
TOSHIBA ELEVATOR AND BUILDING SYSTEMS CORPORATION

eco スタイル

FUTURE DESIGN

ELEVATOR NEWS

安全で快適なエレベーターの未来をデザインする
vol.36 2013

CONTENTS

03-09 特集●交通と都市の未来形

出雲イズム

伝統と文化を守り伝える
出雲流町づくりの極意

10-13 ユーザー訪問●乗り心地、いかがですか？
vol.4

国立大学法人島根大学
医学部附属病院

14-15 連載●私の忘れられない本・映画

田口 ランデイ さん(作家)

16 連載●おもちゃの乗り物博物史【番外編】

人類の見果てぬ夢が生んだ
からくり人形

(アンケートにご協力ください)

今号の東芝エレベータ広報誌『FUTURE DESIGN』Vol.36 に対するご感想をお聞かせください。抽選で10名様に「特選品」をお送りします。今号の特選品は、特集で紹介した出雲窯の「縁鉄砂呉須釉皿」です。1989年、第10回日本陶芸展で優秀作品賞・毎日新聞社賞を受賞した逸品で、国際交流基金の主催で2008年から2011年にかけて実施された海外巡回展「WA - 現代日本のデザインと調和の精神」にも出品されました。著名なプロダクトデザイナー柳宗理氏の指導のもとに製作された作品です。

- 応募方法
同封のはがきまたはFAX用紙、
E-mailでご意見をお送りください。
- 締め切り
2014年2月28日到着分まで有効。



東芝エレベータ株式会社

FUTURE
DESIGN

ELEVATOR NEWS
vol.36 2013

2013年11月30日発行 発行 東芝エレベータ株式会社 広報室
〒141-0001 東京都品川区北品川6-5-27 電話 (03) 5423-3332
URL <http://www.toshiba-elevator.co.jp>
E-mail elevator@po.toshiba.co.jp

制作 有限会社イー・クラフト+有限会社ベル・プロダクション デザイン 手塚みゆき
印刷会社 メディアグラフィックス

【表紙解説】



出雲市北東部に位置する平田町は、宍道湖につながる水運に恵まれ、特に、江戸末期から明治初期の時代に良質な木綿の交易拠点として栄えました。そのため、同町の新町、片原町、宮の町周辺は「木綿街道」と呼ばれています。現在、木綿交易こそ行われていないものの、当時の繁栄をしのばせる商家、旧家の建物が今なお数多く残り、これらのなかで空き家となった建物を使って、様々な町づくりのイベントが開催されています。



地球環境に配慮した植物油インキを使用しています。

特集●交通と都市の未来形

出雲イズム

伝統と文化を守り伝える

出雲流町づくりの極意

出雲は、おおくにぬしのおおみかみ大国主大神からあまてらすおおみかみ天照大御神への国譲り、やまたのヤマタノヲロチなど、数多くの神話の舞台となり、「かみきと神話の故郷」として全国に名をとどろかせている。

しかし、以前は、一部の著名な観光スポットだけが観光客で賑わい、町の活性化が問題になっている地域も少なくなかった。

この特集では、ライターの後藤鈴子氏が、出雲市内の町づくり活動に数多く関わってきた

出雲市在住の建築家・江角俊則氏の案内で、市内の主な町づくりの現場を訪ねてみた。

伝統と歴史を活かしながら新しい町づくりを進め、外部の人を今も惹きつけてやまない出雲。

そんな出雲の新しい魅力をお届けしよう。

※今夏は、編集部が取材した島根県をはじめ、中国地方、東北地方を中心に豪雨が相次ぎました。被害にあわれた皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、ご遺族や犠牲になられた皆様に対して、深くお悔やみ申し上げます。



出【Izumo】雲

鷺浦地区
十日御碕

p.8

●日御碕

●鷺浦地区

●出雲大社
出雲大社前駅

出雲大社周辺

pp.4-5

●木綿街道

いちばな 一畑電車北松江線

みだの 美談駅

斐伊川

一畑電車大社線

まめ ネット事務局
(NPO法人しまね医療情報
ネットワーク協会)

●出雲市駅

●島根大学医学部
附属病院

山陰本線

しゅっさいがま ●出西窯

木綿街道
+ 出雲市駅
周辺

pp.6-7

穴道湖



今回の旅人

江角 俊則 ●ESUMI Toshinori

島根県出雲市出身で、現在、出雲を拠点に活動している建築家。工学院大学建築学科を卒業後、高野重文建築事務所等を経て、2007年より江角アトリエを主宰。主な作品として、本文中に登場する〈神門通りおもてなしステーション(実施設計・工事監理)〉(出西窯無自性館)などがある。

後藤 鈴子 ●GOTO Reiko

自動車メーカー、食品メーカー、電話会社などのPR誌、大手広告代理店の広報誌、新聞など、多彩なジャンルで活躍するライター。株式会社宣伝会議、株式会社ユー・ピー・ユーなどで勤務したあとに独立し、有限会社ベル・プロダクションを設立した。医療系の実用書も得意とする。

じゃあ出発するよ!

いずもっち

- ・出身地：因幡國
- ・年齢：不詳
- ・旅の目的：命の恩人に会いたくなったので



出雲大社 周辺

伝統と文化に新しい要素を加えながら再生を図る町

出雲大社周辺といえば、出雲大社の門前町である神門通りと、旧暦の10月10日に、全国から集まった神々が通るといわれる神迎の道が代表的な散歩コースだ。この2つの地域で、地元住民が主体となって進めている町づくり活動を紹介しよう。



④ 一畑電車

なんと、自転車での乗り降りも可能。車中では電車アテンダントが車窓からの風景をガイドしてくれるサービスも！



⑤ 神門通りおもてなしステーション

焼杉を用いた黒い壁が印象的な観光案内所。店内に一步入ると、木の温もりと住民のおもてなしの心を感じる。

松の皮が削られているッ！



③ 神門通りの松並木

第二次世界大戦の時、松ヤニをとって燃料の一部にしたためだったとか……。



① JR旧大社駅

1990年JR大社線が廃止されるまで利用された。外観は純和風だが、内部は天井が高く、大正浪漫の香りが漂うつくりになっている。

神門通り



⑥ 出雲ぜんざい学会 壺号店

旧暦の10月に行われる神在祭(かみありさい)の時に食された神在(じんざい)餅が、ぜんざいの語源とか。



② ANT WORKS GALLERY

大正時代の民家を再利用したカフェギャラリー。木工作家であるオーナーの作品もあり、木の温もりが伝わってくる。スケッチ体験もできる。



木の温もりを感じる、素朴な子どものおもちゃをつくりたいな。



オーナー松谷ちどり氏の夫、松谷伸吉氏。

神門通りをおもてなしできる通りに

今年、出雲大社の門前町の神門通りは歩道から人があふれるほど賑わっている。しかし、10年ほど前は沿道に空き家が多く、観光客は大社脇の駐車場に車を停めて参拝するだけで、通りを歩く人はほとんどいなかったという。

そこで出雲市は、御本殿修造が開始された2008年頃から、観光客に楽しんでもらえる神門通りを目指して様々な取り組みを開始した。

出雲市役所では、駐車場の整備や石畳の歩道づくりなど、インフラ整備に着手。今年のピーク時には臨時送迎バスの運行も行った。また、出雲観光協会では、ぜんざい発祥の地として出雲をアピールするために、出雲ぜんざい学会を設立。通り沿いにぜんざい屋もオープンさせた。

神門通りの活性化には、ほかにも様々なプロジェクトチームが参加している。地元の建築家を主体とする出雲建築フォーラムと、地方都市の再生を考えるCitySwitch Japanが共同で設立したCitySwitch出雲(詳しくは9ページ参照)がその代表例だ。CitySw



伝統・文化を守り伝えながら、 さらに魅力ある町へ



神迎の道の氏神様である越峠荒神社に行灯を並べ、
賑やかな正月を演出。

写真提供：神迎の道の会



青木 敦生氏
神迎の道の会 代表

9年ほど前から神迎の道の会の代表になりましたが、近所の人と話をしていると、今でも発見があります。そのたびに自分は、すごい場所に住んでいるんだな、ということを確認しています。

実際、神迎の道付近は神迎祭（かむかえさい）のほか、全国でも唯一といわれる神事が多く伝わっているんです。例えば、毎月1日の早朝、稲佐の浜から「潮汲籠（しおくみかご）」という竹の柄杓（ひしゃく）を使って海水を汲み、近隣の社を回りながら籠の葉で海水をまき浄める「潮汲み」という風習もそのひとつです。残った海水は家に持ち帰り、玄関、神棚、仏壇、釜場、戸口、トイレ、部屋、家族にもまいて浄めるんですよ。私は、このような伝統や文化を次世代に伝えると同時に、全国にも広めたいと思い、ブログで参加を呼びかけています。

そのほか、住民の皆さんと一緒に、訪れた人をおもてなしするイベントを実施したり、City Switch 出雲と共同でワークショップを開催したりといった活動もしています。これらの活動は、神迎の道を訪れた人たちだけではなく、地元の方々に「今まで以上にこの地域が好きになった」と好評でした。

現在は、地元の方々が積極的に様々な活動に参加するようになり、訪れた人との暖かな交流の場を広げています。



訪問者をおもてなしするイベントに参加した地元の方々。テーマは「花とひかり」。

写真提供：神迎の道の会

「今の大神町を写真に撮り、伝統的な盆提灯（ぼんぢょうちん）に貼り付け、モバイルにして吊り下げました。日常の風景がこれまでと違うものに見えて面白かった」
伝統的なものに新しい要素を取り入れることで、神迎の道が生まれ変わることを実感したと江角氏は語る。



博物館内を案内してくれた
専門学芸員の岡宏三氏。

博物館に展示されているものはほとんどが実物ですから、迫力を肌で感じることができますよ。

7 高根県立古代出雲歴史博物館

出雲大社の本殿と拝殿の間から発掘された宇豆柱（うづましら＝正面中央に使用された柱）。直径が140cmもある大木を3本束ねた太さは圧巻。



高さ48mと推定される古代の出雲大社を10分の1のサイズで復元した模型。48mという高さは現代の15階建てのビルに匹敵する。



8 出雲大社

これまでの出雲大社の屋根に設けられた千木（ちぎ）は、今年の遷宮によって、ちゃん塗りと呼ばれる技法が施され、古来のように黒く重厚なイメージの千木になった。



神楽（かぐら）殿にかけられている長さ13.5m、重さ4.4tの大しめ縄。一般の神社のしめ縄とない方が左右逆になっている点にも注目！



出雲大社内を案内してくれた出雲観光協会事務局長の
小野篤彦氏（写真右）。



9 神迎の道

白く舗装された神迎の道。通り沿いの家の玄関には花が生けられ、訪れる人をもてなしてくれる。

写真提供（右）：神迎の道の会



こよしこう
越峠荒神社



10 手銭記念館

酒蔵を改築した美術館で、主に
出雲地方の美術品・伝統工芸品などが展示されている。



道がひと目でわかるよう
になってるんだね！

稲佐の浜

神迎の道に残る伝統・文化を
多くの人々に伝える

itch 出雲は、2012年にオープンした観光案内所「神門通りおもてなしステーション」の立ち上げにも中心的な役割を果たしている。

稲佐の浜から出雲大社に向かう神迎の道には、この地域ならではの伝統的な神事が数多く残されている。2004年に活動を開始した神迎の道の会は、この地域に残る伝統や文化を守り、全国に伝える活動を積極的に進めている。

同会ではこれまで、ブログを通じての神事やイベントの告知、通り沿いを花や行灯で飾る「花とひかり」のイベントなど、興味深い試みを数多く実施してきた。2008年には、今回の案内人であり出雲建築フォーラム代表の江角俊則氏が提案したイベントが開催された。



③本石橋邸

1750年頃建てられた、木綿街道最古の建造物。長い2本と短い2本が組み合わさった出雲格子（親子格子）は出雲地方特有のもの。



①岡茂一郎商店

2階部分が低い江戸時代末期特有の建物の特徴のお醤油屋さん。淡口、濃口、さいしこみと3種類の醤油を味見できる。



②木綿街道交流館

旧長崎医家を復元したギャラリー&カフェは、木綿街道の憩いの場。交流棟は様々な会議やワークショップに利用され、木綿街道の文化も体験できる。



⑧来間屋生姜糖本舗

繊維の少ない出雲産・出西生姜を使用し、昔の製法でつくり続けている。上品な甘みと生姜の辛味がマッチした逸品。



⑤旧石橋酒造

木綿街道振興会の事務所。蔵は様々なイベントの会場としても利用されていた。



⑨木綿街道

案内してくれた木綿街道振興会事務局の平井敦子氏（写真右）。



木綿街道

⑦持田醤油店

漆喰のなまご壁と、出雲格子で囲まれたたたずまいが特徴。お客様からのリクエストで生まれた醤油ソフトクリームは一度食べたらやみつきに！

⑥酒持田本店

純米大吟醸「ヤマサン正宗」は、一口で虜になる旨さだ！



見どころがいっぱい隠れているよ！



④平田舟

商家の荷物の搬送や、田んぼの往復、稲刈りの運搬に使用されていた平田舟を復活。川から眺める古の町並みは必見。
写真提供：木綿街道振興会

雲州平田船川

木綿街道 + 出雲市駅 周辺

古い町並みの魅力を大切に 守り伝えながら再生を図る町

かつて雲州平田木綿の集散地として栄えた「木綿街道」でも地元住民が主体となり、古い町並みを活かした町づくりを活発に展開している。木綿街道での取り組みを中心に新しい出雲の魅力を紹介しよう。

めている。

2006年からは、江戸時代に商家の荷物を運ぶ舟として利用されていた平田舟を観光用に復活。町並みを川から見ることもできるスポットとして、観光客にも注目され始めている。

同振興会では、町並みの案内、旧石橋酒造の蔵を利用したのブックマーケットや芝居・踊りなどのイベント、空き家を宿泊施設として活用した勉強会、古民家を活用した茶の湯講座などを実施し、ブログを通じて、全国に木綿街道の魅力を発信している。同時に、地元の人と共同して、玄関に木綿の木を飾ったり、沿道をきれいにしたりといった地道な活動も続けている。

江戸末期から明治初期にかけて、松江城下の次に賑わっていたといわれた木綿街道。その沿道には、当時の面影をしのばせる商家や旧家の建物が今なおいくつも残っている。この古い町並みを大切に守り、全国に伝えるために、木綿街道における様々な町づくり活動に取り組んでいるのが、2004年に地元商店主を中心に発足した木綿街道振興会である。

木綿街道の古い町並みの
魅力を大切に守り伝える



踊りやアートを通じて 出雲の魅力を発信したい

高須賀 千江子氏 自然光ダンサー

3年前に初めて出雲に旅行に来た時、言葉では言い表せない魅力を感じたんです。去年、横浜から出雲への移住を決意した時には、出雲で知り合った友人が住居を紹介してくれたり、助成金制度のあることを教えてくれたりして、トントン拍子で出雲に住めるようになりました。

現在は神楽の勉強をしながらイベントを企画して、出雲を中心にダンサーとして活動しています。

伝統や文化を守り伝える 原動力は住民一人ひとりの力



來間 久氏
來間屋生姜糖本舗
11代目店主

木綿街道は江戸から明治期にかけての古い町並みが奇跡的に残った場所なんです。魅力は、あまり手を加え過ぎず、素朴さがそのまま残されているところだと思います。これって、うちの生姜糖に似ている気がするんですよ。

私は、この魅力ある古い町並みを守り、多くの人に伝えたいという思いから、木綿街道振興会で活動しています。

訪れた方々に街道や古民家の魅力について意見を聞きまとめたり、改築後の古民家に設置する椅子や机をつくったりするイベントには、住民の皆さんにも参加していただき、とても盛り上がりました。これらのイベントを通して、改めて住民一人ひとりの力を結集する大切さを実感しました。

最近では住民の皆さんの意識が向上し、自発的に活動する気持ちも高まっていると感じます。そんな皆さんの気持ちに応えられるよう、木綿街道が重要伝統的建造物群保存地区に選定されることを目標に私も努力していきます。



行灯に火を灯すイベントで使用された和紙製の行灯。イベントでは、幻想的な木綿街道の町並みを見ることができたという。



各家の玄関に飾られている木綿。おもてなしの心が伝わってくる。

暮らしの道具として使ってもらい、喜んでもらえることが一番うれしいですね。



多々納 真氏
出西窯 陶工／代表理事



しゅっさいがま 出西窯

出西窯の登り窯は、松の木を薪として使用し、1200度の高温で焼き上げるのが特徴だ。野の花のように素朴で、健康的な美しさの器をつくり続けたいと、郷土の土を大切に使い続けている。

出雲市駅



出雲市駅前

出雲市には、出雲市駅を発着する9つの路線バスをはじめ、平田生活バス、多伎循環バスなどの市民バスがあり、多くの人に利用されている。また、ドア・ツー・ドアで利用できる高齢者用の相乗りタクシーもある。

バス交通以外に、遷宮の観光需要に対応し、東京・出雲線の空路便が6往復になっています。



原 康正氏
出雲市役所 総合政策部
交通政策課 課長補佐



まめネット

島根県内では、患者の診療情報を医療機関同士で共有するネットワーク「まめネット」が運営されている。このマークが加盟の目印。

写真提供：NPO 法人しまね医療情報ネットワーク協会

若者と地元住民との 共同体験が町を再生する

これまで紹介してきた町には共通点がある。それは、古の趣を感じさせる素朴さが残っていること、伝統・文化を大切に守り、多くの人に伝えたいという地元住民の思いがあることだ。

「昔ながらの素朴で上品なもの、今の時代に合う形で続けていくことが大事だと思います。使い続けると、そのなかから新しい知恵が出てきたりもしますね」と江角氏は語る。そして、次の世代に出雲の魅力を伝え、町を発展させていくためには、「若い人たちが自分のアイデアを試し、小さなきっかけを数多くつくりながら、地元の人と一緒になって活動を進めていくことがポイント」と共同体験の重要性も強調する。

古のものを肌で感じながら、先輩と後輩が一緒になって新しいものを創造し、次世代に伝える——出雲の町づくりの進め方は御本殿修造を手がける職人たちの営みと相通じるものがあるように思う。60年に一度の大遷宮には、出雲の町づくりに必要な鍵も隠されているのではないだろうか。

鷺浦の表札は苗字ではなく屋号の家が多いんですよ。



③しわく屋(貸しギャラリー)
しわく屋という屋号は、瀬戸内塩飽(しわく)本島でつくられた塩の間屋だったことに由来している。鷺浦地区の空き家を活用した拠点づくり事業として、昨年8月にオープンした。写真中央は代表の渡部健一氏。



自家製手焼き瓦せんべいの模様は、楠木正成の家紋である菊水模様。ほんのりとしたやさしい甘さが魅力。



②塩田屋
軒下には、大正初期につくられた丹頂鶴のごて絵が!北前船の寄港地(風待港)として交易が盛んだった町の名残を感じる。



①鷺浦隧道
鷺浦の町並みに通じるトンネル。1935年に地元の人たちが岩盤を手掘りした跡が今も残っている。

鷺浦

鷺浦地区 + 日御碕

緩やかな時間が流れる町

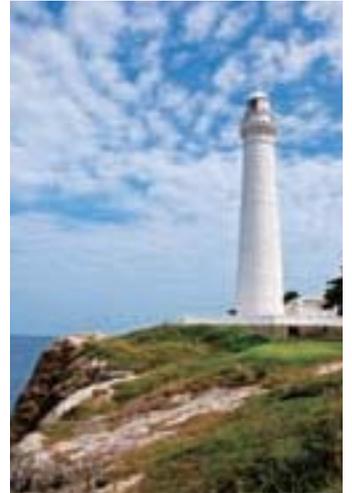
日本海に面した出雲市鷺浦地区や日御碕は、かつて北前船や大阪商船の寄港地として栄えた地域である。港町としての顔も併せ持っていた出雲の古き良き時代の魅力あふれる一面を紹介しよう。



④伊奈西波岐神社
国譲りの時、平和的な解決に向けて奔走した稲背脛命(いなせはぎのみこと)が祀られている社。地元では鷺社(さぎのやしる)として親しまれている。



グラスボート
草原景観と岩礁景観の両方を楽しめる。学術的にも貴重な海の生物を見ることができる。



日御碕灯台
1903年に設置された、日本一の高さ(63.30m)を誇る灯台。1998年には「世界の歴史的灯台百選」のひとつに選ばれた。



海鮮丼
日本海でとれた新鮮な海の幸、高級魚ヒラマサなどがてんこ盛り。「みさき丼」や「古事記丼」といったご当地丼も人気。

日御碕

山陰東芝エレベータの事業エリアと営業所
鳥取県と島根県東部で事業を展開している。



各地点にまつわる神話
※1: 因幡の白うさぎの神話
※2: 少彦名命(すくなひこなのみこと)が常世の国に渡ったとされる神話
※3: 黄泉国のイザナミをのぞき見したイザナガが、怖くなって現世に戻ってくる神話

山陰地区には、東芝エレベータ製昇降機の保守を手がけている会社がある。2010年4月、東芝エレベータと、地域に根ざして事業展開してきた山陰エレベータの合併で設立された山陰東芝エレベータだ。

同社は、鳥取・島根県内に3つの営業所を持ち、3営業所はいずれも、「古事記」で神話の舞台となった地域に位置しており、山陰エレベータは1972年の設立以来数百年の昇降機を納めてきた。

柴田氏は日頃から東芝の知名度アップと顧客情報の収集に努めるかたわら、トータル昇降設備のアドバイザーとして新設営業社員とともに土日も顧客対応をしている。

山陰エレベータと山陰東芝エレベータは、設置台数1000台の達成に向けて様々な活動に取り組んでいる。

さらには、今年10月に設立された東芝のコミュニティ・ソリューション社をはじめ、グループ全体で連携して、東芝のスマートコミュニティ事業推進を押し進めている。

同社は今後、提供サービスの品質をより向上させるために、営業所の数を増やすなど、サービス提供体制をさらに充実させていく予定だ。



柴田 英彦氏
山陰東芝エレベータ株式会社
代表取締役社長
山陰エレベータ株式会社
会長

山陰地区の
垂直移動を支える

縮小化社会の最前線 出雲の再生を目指して

山代 悟氏



YAMASHIRO Satoru ● 建築家 有限会社ビルディングランドスケープ一級建築士事務所 CitySwitch Japan代表
1969年島根県生まれ。1995年東京大学大学院修士課程を修了し、2002年ビルディングランドスケープを設立。
グッドデザイン賞、第3回木質建築空間デザインコンテスト 特別賞など受賞歴多数。神門通りおもてなしステーションでは、山代氏+ビルディングランドスケープが基本設計を担当した。

出雲から魅力ある 街づくりをスタート

島根県は高齢化率で全国1～3位という位置を長年占めてきました。どうしたら縮小化社会の先端をいく島根県、出雲市を、人々が住みたいと思う魅力的な街に再生できるのか？ 私はこうした問題意識から、自分の出身地の出雲で、地元建築家が主体となって運営している出雲建築フォーラム（代表：江角俊則氏）とともに、2008年からCitySwitch* 出雲という国際ワークショップを始めることにしました。

高齢化、あるいは人口全体の減少、税収の減少といった状況を踏まえると、今の島根県は10年後、20年後の日本の姿だと考えられます。そのため、島根が現在直面している問題を考えることは日本の将来を考えることそのものだと考えています。

CitySwitch 出雲の活動を通して、 出雲の魅力を発信

CitySwitch 出雲では毎年、様々なプロジェクトやワークショップを展開しています。参加者が意見交換しながらモノづくりに関わることで、愛着を持ってもらうことを大切にしていますが、参加者

の声をそのままトレースしているわけではありません。

まず、参加者のアイデアを引き出し、それをもとに専門家が責任を持ってデザインする。次に、専門家の手が加わることで、アイデアがどのように変化し、表現されたかを伝えて話し合う。そして、できあがったものをみんなで組み立ててみる。こうした何段階ものプロセスを経ることが重要だと思っています。

例えば、2012年10月にオープンした観光案内所「神門通りおもてなしステーション」では、事前に市民向けのワークショップを3回開催し、施設のコンセプトや使用イメージを共有しただけでなく、室内に設置する棚の使い方を議論しました。それをもとにデザイナーが棚のデザインを工夫し、部品が完成したら、再度参加者の皆さんと一緒に組立作業を行いました。これにより「同じプロジェクトに何度も関わることで愛着が湧いてきた」という声を数多くいただけたと思っています。

CitySwitch 出雲ではこのほか、神迎の道にふさわしい軒先行灯の提案や木綿街道の歴史ある空き家でのイベント、ブックマーケットの開催、一畑電車「美談駅」の改修ワークショップなど、様々な活動を行ってきましたが、参加者からはおもてなしステーションと同様の声をいただいています。

出雲の再生の鍵は 滞在経験者を増やすこと

CitySwitch 出雲の活動成果は意外なところに現れ始めています。例えば、木綿街道のワークショップに参加したある女性は、現在出雲に移り住み、木綿街道の町づくり活動に参加しています。これからの社会には、彼女のように地方に移り住み、地域に貢献できるというロールモデルが必要です。我々の活動とは直接関係ありませんが、ダンサーとして活躍中の高須賀千江子さんもその一人だと思います。

出雲への移住者が増えることは大変望ましいのですが、まずは一人でも多くの人に数日間出雲に滞在してもらうことが重要だと感じています。そのためにはホテルに滞在したり、木綿街道にある古民家を借り切って滞在する、簡易なバックパッカー向けの宿を用意するなど、多様な選択肢を用意する必要があります。多くの滞在形式を用意し、一人でも多くの人に出雲に滞在してもらって、魅力を感じてもらおうこと——これが、出雲の再生、活性化の鍵を握っているのではないでしょう。

*CitySwitch：複数の国と都市をつなぎ、建築家や都市計画家等の交流を通じて、都市の再生や街づくりを考えていくプロジェクト。2007年に設立され、これまで、出雲、ニューカッスル（オーストラリア）、大連（中国）、清水（静岡県）などで活動を展開している。



神門通りおもてなしステーション内に設置される棚を製作するワークショップ参加者。「くもなわ」と名づけられた棚は、ネジやクギを使わずに組み立てられるデザインになっている。



2011年に実施された美談駅改修ワークショップ。参加者全員で足場づくりから開始。壁には何十本もの木材を建て付け、木の温もりが漂う待合室に生まれ変わった。



外来・中央診療棟エスカレーター(1階)
輸送能力向上のため、新規設置された
エスカレーター。同病院の「外来の顔」
としての役割も担う。1階から2階に昇る
途中、ガラス越しに外の景色を楽しむこと
ができる。



井川 幹夫氏
国立大学法人島根大学
医学部附属病院長
理事 (医療担当)

出雲大社は今年、60年に一度の大遷宮に伴う御修造が行われたが、そのお膝元にある島根大学医学部附属病院も5年の歳月をかけ、今年、大規模再開発事業を完遂した。

同病院は1979年に島根医科大学附属病院として設置されたが、80〜81年にかけて病床の増床が行われ、616床の大型総合病院となった。それから約30年経ち、設備の老朽化が進んだため、2008年度に新病棟（C病棟）建設に着手。その後、既存のA・B病棟と外来・中央診療棟（以下、外来棟）の大改修を終え、今年4月、

5年をかけて
病院をリニューアル

同病院長の井川幹夫氏は、再開発事業の狙いについて次のように語る。

「開院して30年以上経ち、大病院に求められる役割が変わってきました。我々は地域の医療を支えるとともに、首都圏の大病院にも引けを取らない世界水準の先進医療を患者さんに提供する必要があります。つまり、地域医療と先進医療の調和が大切です」

先進的がん治療や
手術支援ロボットも

同病院はリニューアルによ

ユーザー訪問

乗り心地、
いかがですか？



公共施設や駅、病院やデパートなど、
北から南まで街の様々な場所で
エレベーターは活躍しています。
ここでは、東芝エレベータのユーザー
さまをご紹介します。

導入事例

vol.4

国立大学法人
島根大学
医学部附属病院

地域医療と先進医療が調和する大学病院

1979年に開院した島根大学医学部附属病院は、5年にわたる再開発を経て、2013年4月、最新設備を備える総合病院にリニューアルした。新病棟の建設と、既存病棟2棟、外来・中央診療棟の全面改修を行い、地域医療と先進医療の担い手として充実を図るとともに、大規模災害時にも対応できる環境を整えた。外来・中央診療棟にエスカレーターを新設するなど、患者中心の全人的医療の実践を目指す同病院長の井川幹夫氏に、再開発事業の狙いや思いなどを伺った。



って、救急医療および急性期医療の充実、各種治療を組み合わせた集学的がん治療の推進、高度医療の確立と普及、教育・研究環境の向上、快適な療養環境の提供などを目指している。また、大規模災害にも対応できるように、C病棟には免震構造を導入し、自家発電装置や地下水くみ上げポンプなども完備した。

C病棟について見てみると、ICU（集中治療室）14床と救命救急センター病床16床を配置している。救命救急センター専従医師も増員して、あらゆる救急患者を受け入れる体制を整備した。また、国立大学病院では2番目となる緩和ケア病棟を5階に設置し、がん治療の初期段階から緩和ケア段階までをカバーした。8階には腫瘍センター病棟も新設し、先進的な抗がん剤治療を推進するために、空気清浄度の高い病室環境を整備した。遠隔操作で体腔鏡下手術を実施できる手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入も、リニューアルの目玉のひとつである。「ダ・ヴィンチ」は、健康保険適用となる前立腺がん治療に活用されているほか、保険適用ではないものの、病院側の負担で腎臓の部分切除術、膀胱の全摘除術を行い、今後、子宮や胃の手術にも使

われる予定である。同病院は患者中心の全人的医療の実践を目標に掲げ、首都圏と変わる先進医療を絶えず導入する努力を続けてきたのである。

地域のリーダーとなる 総合診療医を育成

同病院は、大学病院として教育・研究環境の充実も重視している。例えば、今回のリニューアルでは、シミュレーターを使った研修が可能な内視鏡手術トレーニングセンターや、医療技術の向上を目的としたクリニカルスキルアップセンターなどを、教育エリアにまとめて整備した。

研究・臨床能力が高く、地域でリーダーシップを発揮できる総合診療医を育成するために、他県の大学病院との連携を推進している。また、2011年には地域の行政や医療機関、医師会などと連携して、地域医療に貢献できる医師のキャリア形成を支援するしまね地域医療支援センターも設置した。

「現在、兵庫県の大学病院などと連携しながら、高齢化社会に対応した地域医療のあり方を研究し、医療・介護・福祉を横断して高齢者ケアを推進できる総合診療医の育成を図っています。今後、当病

院が中心となって地域の介護事業者・福祉団体などとコンソーシアムをつくり、お互いに学び合いたいと考えています」と井川氏は語る。

ホテルのように 患者を迎え入れたい

同病院ではリニューアルにあたり、快適な療養環境の提供も重点項目のひとつに掲げていた。そのため、従来6床だった多床室を4床に減らし、個室の数を増やした。また、すべての病室にテレビ、冷蔵庫、ソファアベッドなどを導入し、インターネットも利用できるようにした。

外来棟には、患者のサポートを行う女性の「外来コンシェルジュ」を2名配置した。井川氏は、ハードだけでなく、スタッフの対応などソフト面の充実も重視しているからだ。また、これまで中庭だったスペースを改築してエスカレーターを4台導入し、1階にはコンビニも誘致した。

「ホテルのように患者さんをお迎えしたいと思って、外来棟にエスカレーターを新設しました。患者さんの評判はいいですよ。職員も皆、便利になったと喜んでいます」と井川氏は語る。

リニューアルで 快適なエレベーターに

外来棟では既設のエレベーターも改修の対象になった。外来棟にはもともと、待合ホールに面した位置に2台、少し奥まった位置に3台のエレベーターがあった。しかし、導入時期が古く、運転効率が悪かったため、職員の出勤時には待ち時間が長くなり、看護師のロッカー室の前で人が

あふれる状態だったという。また、設置年数が長くなるにつれ段差の発生などの問題も生じていた。財務部施設整備課長の井上修一氏は次のように語る。

「段差や着床時のショックが大きくなり、乗り場とかご室の間の隙間も広がって名札や鍵を落とすなどのトラブルがありました。患者さんが転倒する恐れもあったので、リニューアルは必須でした」



井上 修一氏
国立大学法人島根大学
財務部施設整備課長

実は井川氏は、身をもってエレベーターの段差の危なさを感じていた。自ら足首を骨折して入院した際、エレベーターの段差はストレッチャー



外来・中央診療棟のエレベーター乗り場(1階)

外来・中央診療棟に玄関から入ると、広々とした待合ホールがある。今回、リニューアルされたエレベーターのうち、2台はこのホールに面した位置に設置されており、主に外来患者に利用されている。



国立大学法人島根大学 医学部附属病院

島根大学医学部附属病院は、病床数600床、年間入院患者数延べ14万5161人、外来患者数延べ22万7990人(2012年度)の規模を誇る総合病院で、職員数は計1168人に達する。

2008年度から始まった再開発事業は総事業費200億円を投じた大プロジェクトだ。新設されたC病棟は9階建ての免震構造で、敷地全体で大規模災害に備えている。3日以上自家発電が可能な設備や、最大で1日43万ℓ使用可能な地下水くみ上げポンプを備える。さらに、立体駐車場は3000名以上収容可能な避難所に転用可能で、応急手当やドライブスルー方式の外来診療もできる。

DATA



みらい棟のエレベーター乗り場(2階)

外来・中央診療棟に隣接するみらい棟には、しまね地域医療支援センターが入居している。エレベーターのドアには、エッチング加工により美しい模様が施されており、かご室壁面の化粧鋼板には淡いピンクで桜の花柄模様があしらわれている。



▲ドアの拡大図



▲かご室壁面の拡大図

搬送中の患者に予想以上の衝撃を与えることわかったのだ。

「患者さんが点滴台を押しながら歩く時に段差に引っかかりやすいし、お年寄りはずり足で歩くので転倒の可能性が高まります。もちろん、災害対策の一環としても最新機種にリニューアルする必要があるました」

こうしてこの5台のエレベーターは真つ先にリニューアルの対象となるが、現場で利用中のエレベーターであったため、リニューアル工事は慎重に進められた。再開発事業に担当として長らく携わってきた財務部施設整備課の吉田泰樹氏は工事中の苦労についてこう語る。

「現場からは、5台のエレベーターをなるべく早くリニューアルしてくれといわれていました。しかし、患者さん

がいるので一度に停止するわけにはいきません。そこで、東芝エレベーターと相談しながら、リニューアルの順番を決め、スケジュールを立てていきました。結果、予定より早く完了して助かりました。とはいえ、この間、工事の着手時期やスケジュールの病院内への通知には気を遣い、張り紙や文書の配布を通して周知徹底しました。今では待合ホールのエレベーター2台が連動して動くようになったので、待ち時間が格段に短くなりました」

5年の歳月を費やして新しく生まれ変わった同病院。今後、島根県において、地域医療と先進医療の核として機能することは間違いのない。

メーカーの立場から

患者や職員のことを最優先に考えて、工事の進捗を管理

現場に1年半常駐
ゼネコンと協力関係

島根大学医学部附属病院の再開発事業でエレベーター、エスカレーターに関わる工事の管理を一手に引き受けた東芝エレベーター中国支社の大場勝則は「1年半にわたる長丁場で困難はありましたが、自信ができました」と語る。中国支社は広島市内にあるため、大場は出張市内にアパートを借り、2011年10月から1年半、現場に常駐した。東芝エレベーターは、再開発事業関連で、新設エスカレーターを4台、リニ

ューアルのエレベーターを9台、新設エレベーターを3台受注した。これだけ台数が多いと、工事の順番と段取りを調整するために施工および建設を担当するゼネコンと綿密な打ち合わせが必要になる。また、リニューアル工事も併う場合、ゼネコンと協力関係を築かなければ工事はスムーズに進まない。大場は、ゼネコン担当者とは良好な関係を構築するのに注力したという。

期間のスピードも要求されてきました。時には昼夜2交替で進めましたが、私1人ですべて管理していたので、プレッシャーは常にありましたね」

1人で4人分の活躍が自信に

病院では絶えず人の出入りがあるため、安全性には最も気を配った。例えば、資材の搬入・搬出は人が少ない土日か、早朝あるいは夜間に行い、エレベーター前の作業スペースも必要最小限に絞り込んだという。また、病棟のエレベーターリニ

ューアル工事では騒音に留意し、入院患者の就寝の妨げにならないよう夜8時には工事を終わらせるようにした。通常、工事を準備する工務と現場を管理する工事は別の人間が担当し、リニューアルと新設も別々に対応するのが一般的である。本来なら前述の複数の担当者が対応する案件だが、会社側は大場の力量を評価していたため業務は大場1人で担った。目が回るような毎日となった1年半であったが、大場は無事終わらせることで、大きな自信となったようだ。

『万葉集』

千年以上読み継がれてきた
古典作品と向き合う

田口ランデイさん（作家）



心情を文字で表現した、
転換点に位置する作品

『コンセント』で衝撃的な作家デビューを飾って以来、数多くの作品を執筆してきた田口ランデイさん。田口さんにお会いするため、待ち合わせ場所の神奈川県湯河原町へと向かったのは10月初旬のこと。秋とはいえ、まだ

歩くと少し汗ばむ日の午後、フランス料理店のテラスをお借りしてお話を伺った。

田口さんが「私の忘れられない本」として挙げたのは『万葉集』。お聞きしている間、テラスの背後に鬱蒼と繁る竹林が吹き抜ける風にざわめき、『万葉集』の話題にピッタリの雰囲気醸し出してくれた。

『万葉集』をはじめとする古典作品と田口さんが真剣に向き合うようになったのは、それほど以前のことでない。きっかけは書店だった。

ある時、書店の棚の前に立っていて、ふとこう思った。ここでは、多くの書き手たちの様々な作品がせめぎ合い、スペースを取り合っている。毎年、多くの作家たちがデビューしては、いつの間にか消えていく。そのなかであって、いつまでも棚に残り続けている古典とは何だろう、と。

百年前の作家、千年前の作品。これらの本たちはなぜ残ることができたのだろう。自分も小説を書いている表現者の一人として、それが知りたくなった。

田口さんは、片っ端から古典を読み始める。そして、たどり着いた答え——それは今も読み継がれている作品が皆、当時のアヴァンギャルド（前衛）だったということ。その時

代、その時代に、まったく新しいことをやった人たちの作品だけが、今に読み継がれているのだ。

では、『万葉集』はどこがヴァンギャルドだったのか。

「日本の歴史のなかで、『万葉集』は自身の心情を文字で表現したものとして、大きな転換点に位置する作品です。

『万葉集』は万葉仮名というもので記されています。万葉仮名とは、日本語を表記するために用いられた漢字のことで、漢字を表音文字として使っています。物の形を崩してつくられた甲骨文字から発達した漢字は、それ自体が何らかの意味を持っていきます。数ある漢字のなかから日本語の意味に近いものを選んでいかないと、漢字本来の持っている意味に負けてしまう。そこで、ど

の漢字を選んで日本語を表現するか、当時の日本人はすごく悩んだと思います。そうした苦闘のなかで独特の日本文化が形成されてきたのです」

音読を通して 文字の封印を解き放つ

それまで、詠まれたまま消えてしまった歌が、文字という記号に変換されて『万葉集』のなかに封じ込められている。それを声に出して読む。その音読という行為を通して、再び歌を世界に解き放つ。そこそが『万葉集』を読む面白さだ、と田口さんはいう。

「『万葉集』を音読すると、当時の何か不思議な力のようなものが感じられるのです」
例えば、こんな歌がある。

石ばしる
垂水の上の
さ蕨の

萌え出づる春に
なりにけるかも

『万葉集』巻八にある志貴皇子の歌である。

田口さんがこの歌と出会ったのはまだ高校生の頃。古典の教科書に載っていた。最初にこの歌を読んだ時、歌のよさはさっぱりわからなかった。ただ情景しか描写されていない。だから何なの？ そう思いつつも、30年経ってもこの歌を忘れることはなかった。その理由を田口さんはこう述べる。

「それは音として、感動が封印されているからだと思えます。何年経っても、はつきりとしたイメージが浮かぶのです。ザーツと水が流れて滝になっている。そのほわりにはわらびが芽吹いている。あたりはキラキラとした春の景色で、すがすがしい爽やかな感じがこの歌から伝わってくる。大した意味はありませんが、ものすごく力強い歌です。さらに深く考えてみると、枕詞『石ばしる』のなかにある『石』

は大変強い言葉です。民俗学者の折口信夫氏は、『石に魂が宿ると岩になる』といっています。『垂水』というのは、滝のことですね。『滝』という文字は、『竜』という字を含んでおり、その現象自体がひとつの生命体として捉えられるわけです。そう考えると、意味のない歌が本当に躍動感のある命を歌ったものだということとがわかってきたのです」

『万葉集』は、ある意味で言葉の世界である。当時は今よりもずっと、言葉そのものが力を持っていた。

こうした『万葉集』への関心が、直接田口さんの小説に影響を与えることはないのかもしれない。だが、同じ言葉を探ることを生業とする人として、田口さんが言葉の宝庫からすくいとってきたものが、何らかの形で、今後の作品の糧となっていくであろうことは、『万葉集』への熱い語り口から容易に想像できた。

そこで最後に、次回作についてお聞きしてみた。年内に出版を予定しているのは、座禅をテーマとした書き下ろしの単行本『座禅ガール』。さらに来年に向けて連作短篇や書き下ろしも準備中という。そこにはきつと、現代の言葉が響いているに違いない。

Pick Up
今回取り上げた本

『万葉集』

収録歌数・4500余首
巻数・全20巻

日本最古の歌集である。成立年代に関しては、正確なところはわからない。収録されている歌のうち、最も古いもので5世紀前半、最も新しいもので759年とされている。

『万葉集』は写本として伝わった。現存するなかでは、11世紀半ばに書写されたとされる加賀藩主の前田家から桂宮家に献上された「桂本」が最も古い。編者についても各説あるが、現在では、大伴家持説が有力である。

歌の種類は、内容によって大きく相聞歌、挽歌、雑歌の3つに分類される。相聞歌は親しい間で贈答された歌のことで、いわゆる恋歌もここに含まれる。挽歌は人の死にかかわる歌、それ以外が雑歌である。



『新万葉集読本』
(角川学芸出版)



『日本の古典をよむ4
万葉集』
(小学館)

たぐち・らんでい●作家。1959年生まれ。広告代理店、編集プロダクション勤務を経て小説家に。初の小説『コンセント』は直木賞候補となった。以後『モザイク』『アンテナ』などの作品を次々と発表。エッセイも多い。





茶酌娘

(江戸時代末期・日本製)

製作…田中久重
所蔵…NPO法人久留米からくり振興会

人類の見果てぬ夢が 生んだからくり人形



BACK TO
1799

寛政11年、べっこう細工職人の長男として生まれた田中久重だったが、家業を弟に譲り、自らはからくり人形師の道歩んだ。晩年、久重はその豊富な技術力を活かして銀座に工場を設立。やがてこれが東芝へとつながってゆく。

近代のおもちゃの乗り物を中心に紹介してきた「おもちゃの乗り物博物館」は、前回でひとまず完結。今回はその番外編として江戸時代につくられたおもちゃをひとつ紹介しよう。

写真は、茶運び人形、一名「茶酌娘^{ちやくみすめ}」である。有名な人形なので、テレビ等でご覧になった方もあるかもしれない。

主人がお盆の上に茶器を載せると、茶酌娘は足を前後に動かしながらカタカタと客の前まで歩み寄り、その前でピタリと止まる。客はお盆の上の茶器を取り、お茶を一服。

飲み終わって茶器をお盆の上に戻すと、くるりと向きを変えて主人のもとへと戻ってくる。茶酌娘は主人と客の間を結ぶ、いわば茶器の乗り物なのである。精巧な動作は、人形のなかに組み込まれた歯車とゼンマイの働きによって生み出されている。このような見事な動きを演じてみせる人形が、まだ電気もない江戸時代につくられていたことに驚きを禁じえない。

からくり人形は、西洋ではオートマタ(自動人形)と呼ば

れ、その歴史は遠くギリシャにまで遡ることができる。日本のからくり人形も、もともとはヨーロッパから伝えられたとされるが、日本のからくり人形師たちは、さらにそれをブラッシュアップし、より優れたからくりを数多く作り出すことに成功している。手品をするからくり人形、軽業をするからくり人形、あるいは祭礼のなかに取り入れられて祭りを盛り上げる役割を担ったからくり人形等々である。そして、この「茶酌娘」もそのひとつだ。

人が自らの手によって、それまで動かなかったモノに命を吹き込んでみたいと願うのは、人類本来の見果てぬ夢なのかもしれない。そして、その夢を実現するための創意工夫が、次々と新しい技術を生み出してきた。例えば、東芝の祖の一人、田中久重もまた「からくり儀^ぎ右衛門^{えもん}」の異名を持つからくり人形師であったことは、その証左といえる。彼もまたモノに命を与える夢に魅了された一人であり、その夢は、今も東芝の技術者たちの心に受け継がれているのだ。